



©Human Asia

模擬国連人権理事会 普遍的定期的審査（UPR） 2022年 第7回大会 報告書

西南学院大学
法学部国際関係法学科

上野大我
齊田花乃
吉川さくら



CO-ORGANIZERS

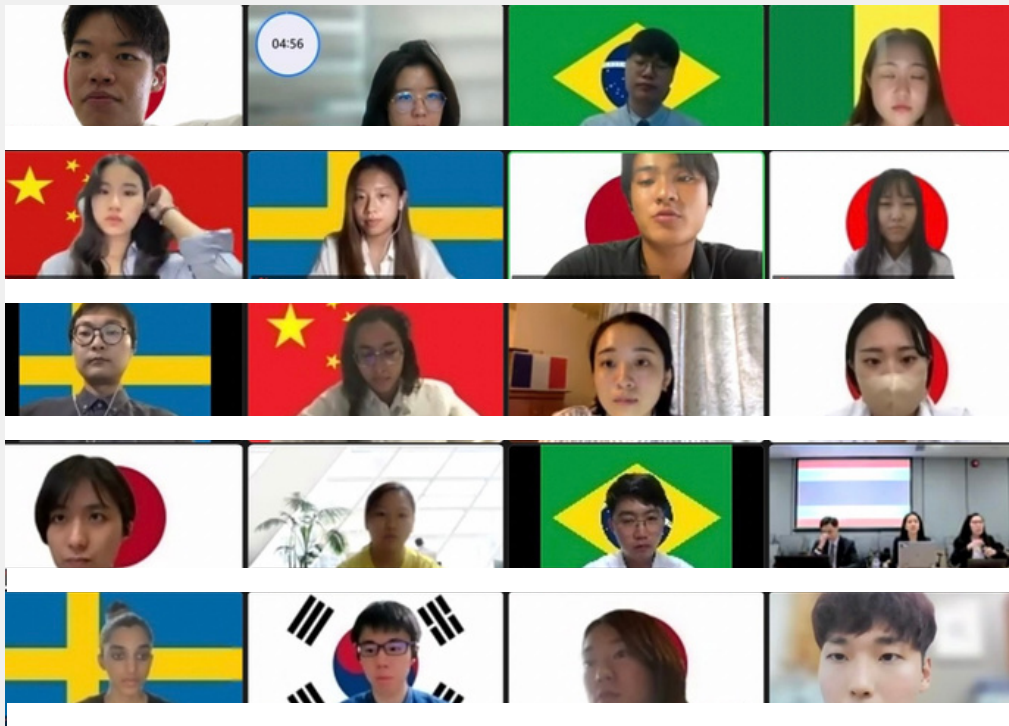


SPONSOR



I-Model UN UPRとは？

I-Model UN UPRは、国際連合人権理事会における普遍的定期審査（Universal Periodic Review）の процедуруを模擬的に体験するシミュレーションです（主催：韓国NPO法人Human Asia）。国連憲章に基礎づけられたUPR手続は、当事国のみが審査対象となる人権条約制度とは異なり、すべての国連加盟国（現在は193ヶ国）の人権状況が審査対象となります。本シミュレーションでは、日本・韓国・中国・北朝鮮が審査対象国となり、参加者は各国の代表団としてロールプレイを行い、各国の人権の保護と促進のための持続可能な解決策を分析・提案します。東アジアにおける人権問題を検証する本シミュレーションは、人権に関する理論的な知識を得ながら、実践的な学習を行うことができる機会となっています。



©Human Asia (個人情報保護のため一部修正)

I-Model UN UPRの目標

- 自国の人権状況についての理解を深め、国際社会の責任ある一員となること。
- 日本、韓国、中国、北朝鮮の人権問題に対する認識を高め、各国が現在直面している人権課題について対話形式で議論し、世界に対する視野を広げること。
- 国内人権制度強化のための有効なメカニズムとしてのUPRプロセスの重要性を理解すること。
- 外交言語や雰囲気を体験することで、リサーチ、スピーチ、ライティング、クリティカルシンキング、チームワーク、リーダーシップなどのアカデミックかつ実践的なスキルを身につけること。

I-Model UN UPR の流れ

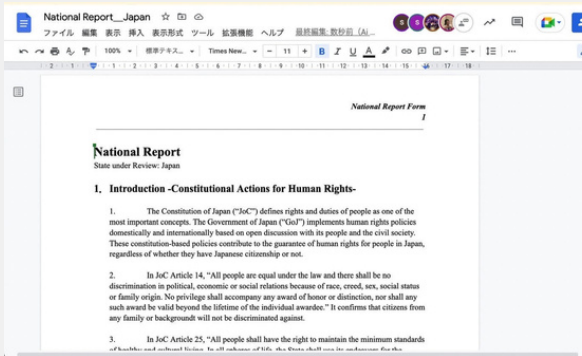
【各テーマに関する調査】

今年のテーマは、移民・難民の権利、健康への権利、気候変動と注目を集める問題ばかりです。すべての審査対象国が質問されるテーマについて事前学習を進めます。



【審査対象国の報告書作成】

それぞれのテーマについて他国から事前に受けた質問に答える形で、国家報告書を作成します。自国の人権法政策について書面での建設的対話を心がけます。



【口頭による審査】

口頭での審査では、審査対象国の政府代表団に対して、他国から追加の質問が投げかけられます。建設的な対話の実現に向けて臨機応変な協議が求められます。

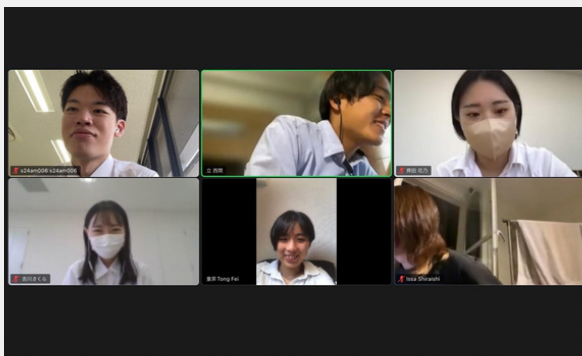


©Human Asia



【最終報告書の作成】

審査終了後、審査対象国は、すべての勧告、コメント、審査中に作業部会が提起した質問に対する回答などをまとめ、最終報告書を作成します。





上野大我

法学部

国際関係法学科3年

私は今回初めてI-Model UN UPRに参加しました。そこでは去年参加した模擬裁判とはまた違う力を必要としました。それは、「対話」です。今回はオンラインでの大会開催となり、Zoomでみんなの顔が見える状態でした。そのため、一人が発言していると皆耳を傾けて頷く姿が見られました。しかし、私の場合はそうではありませんでした。皆首を傾げた状態で顔を顰める方もおられとても屈辱感を味わいました。こんなに恥ずかしいと思ったことはありません。大会後の講評では、「**英語で相手に伝えようとする力**」をもっと養うべきだと助言をいただきました。

私は大会まで国内の人権問題をリサーチしてきました。そして調べたことを単純に英語にし、大会当日にそれを述べました。この時、「英語だから伝わる」という固定観念が壊されました。「翻訳機に頼って自分で伝えようと努力していない文章」と、「**不適切な単語、文法だけれどもボディランゲージなどを活用して、自分で相手に伝えようと努力した文章**」では、全く違う相手の反応が見られました。後者の方が相手も頷いてくれて、興味を持ってくれたような反応が見られました。

今回の大会での経験はとても貴重なものになりました。普段生活していて英語が話せなくても、苦労も屈辱も味わうことはないので、英会話力を養う意欲が上がることはありません。しかし、**今回の大会では、韓国の学生や同年代の日本国内の学生また留学生の英会話力からとても刺激を受けました。**このモチベーションをこのまま維持し、後期にある模擬裁判に備えたいと思います。ぜひみなさんも一度自分の現在地点、周りを見る意味でもこのような大会に参加してみてください。景色が全く違いますよ。

齊田花乃

法学部

国際関係法学科3年



私は、このI-Model UN UPR大会を通して、「伝える意思」の重要性を学びました。大会前、チームで協力しながら膨大な情報を蓄え、この分野に関しては、「誰にも負けない」と思えるほどの事前準備をすることができました。大会の中で他の学生からどのような質問が来ても十分に返答できる自信がありました。そして大会当日、議論は自分の想定通りに進み、返答に困ることはありませんでした。しかし、**私と他の学生との発言には大きな違いがあることに気がつきました。それは、どれだけ「伝える意思」があるかどうか、ということです。**

私は準備の段階で返答の内容のみに着目をしすぎてしまい、大会当日、事前に準備をした情報を羅列しただけというような発言をしていました。建設的な対話が大きな軸となるこの大会では、互いの意思を汲み取り対話を続けることが最も重要です。おそらく、私の発言には「伝える意思」が欠けており、相手の学生は私の意志を汲み取ることが難しかったと思います。**より濃く、質の高い議論にするためにも「伝える意志」というものが非常に重要であったということに気がつきました。**

私はこのような国際ロールプレイ大会に出場することは初めてでしたが、世界の学生たちのレベルの高さに驚かされました。英語のスキルや国際人権法に関する知識はもちろん、対話能力も高く、自分自身改善しなければいけない点が多く見つかりました。しかし、その一方でリサーチ力や論点に関する情報収集量など、大会までの準備に関しては他の学生に勝る部分もあったと思います。今後の学習に向け、このような得意分野をさらに伸ばしつつ、I-Model UN UPR大会で見つけた反省点を改善していきたいと思います。そして、**国内外を問わず人権に関する知識や考えを養っていき、人々の心に「寄り添う」ことのできるような学びを進めていきたいです。**



吉川さくら

法学部

国際関係法学科 3年

私は二つの目的を持って、この大会に参加しました。一つ目は、各国代表である外交官としてのロールプレイングを行いながら、「国内外の政治問題について建設的な対話を行うスキルを身につけること」、二つ目は、日本の人権保護に関する政治的枠組みを国内外両方の視点から学び、「日本の人権状況と問題についての理解を深めること」です。国内のみならず、他国の同世代の学生と同じテーマについて考える時間は、日常生活において、限られていると思います。他国の学生と大会で戦っていく中で日本の学生にはない良い面をたくさん発見できました。

特に今後の参考にしたいと感じたことは、「相手に伝えようとする気持ちを持つこと」です。今回の大会には、事前に自国がどのような人権条約を批准しているか、どのような人権政策を行っているのかについて、調べる時間がありました。しかし、準備において、インプットの時間が9割を占めていたため、大会中にいざ伝えようとしても上手く伝わっている実感がありませんでした。それに対して、他国の学生は母国語が英語ではないにも関わらず、調べたことを自分の中に落とし込み、自分の言葉で伝えようという気持ちが伝わってきました。ただ自国のことを報告するだけでなく、相手の目を見て、訴えかける姿勢はこの大会にかかわらず、人と対話する際に大切なことだと考えます。そのため、今後は、調べることにとどまらず、人に伝えることを念頭に置きながら、学習していきたいと思いました。

この大会を通して、どの国の学生からも自国の人権、他国の人権をより良くしたいという気持ちが伝わってきました。自国に投げかけられた質問に対して、真剣にチーム内で相談する姿など小さな行動が積み重なり、世界の人権がより良いものとなっていくのだろうと感じました。日本国内の人権について触れる機会はたくさんあると思います。その中で他国の人権について考えられる数少ない機会であったI-Model UN UPRに出場できたことに感謝し、人権への学びを続けていきたいです。

根岸陽太

法学部

国際関係法学科 准教授



I-Model UN UPRへの参加は今大会で2年目となります。1回目に参加した2018年大会は対面での開催でしたが、2022年大会はコロナ禍のためオンラインでの開催となりました。対面での総合的なコミュニケーションとは異なり、オンラインでは現場の雰囲気を感じるのが難しく、苦労する場面も見受けられました。しかし、参加した学生は、国連人権理事会UPRの理念である建設的対話をオンラインで実現するために、準備段階の書面から本番の口頭弁論に至るまで、緻密に作業に取り組んでくれました。他方で、3名とも英語というグローバル言語で、自らの考えを他人に「伝える」という点において、今後に克服すべき課題を見つけたようです。**物理的な壁を超えてグローバルな交流を持てたこと、同年代のアジア地域の学生たちと対話する機会を持てたことは、今後の成長にとって貴重な経験となったはずです。**



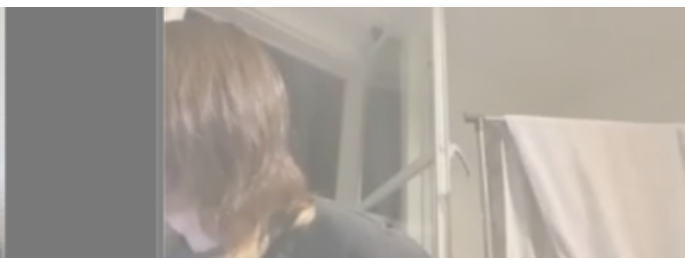
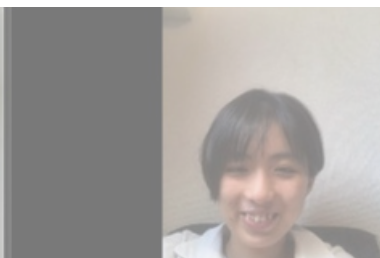
I-Model UN UPRへの参加は国際法学習プロジェクトKARDIANOIAの一環として実施しています。

プロジェクト詳細は下記HPに記載しています。
随時参加メンバーを募集しております。
<https://www.seinan-kardianoia.com/>

本プロジェクトの第一義的な目的は、「国際の狭間に置かれた人々に寄り添う」ことのできる【心 (KARDIA)】を備えた人間に成長することです。国際法学習では、助けが必要な人を「救う」側の活動に焦点が当てられることが多いですが、そもそも「救われる」側がどのような痛みを味わっているかという倫理的な感覚がなければ本当の意味での救いにはなりません。そこで、本プロジェクトに参加する学生には、まず何よりも「寄り添う」という倫理を基本に据えて勉学に励んでもらいます。

他方で、剥き出しの生の現場に置かれた人々に「寄り添う」ためには、心を尽くすだけでは不十分で、それを現実にするための知恵が必要になります。本プロジェクトは、入管・外交・戦争・裁判といった様々な場면을模擬的に体験することで、実践的に【知 (DIANOIA)】を獲得することができます。これらの模擬的な取組では、それぞれ国際難民法・国際人権法・国際人道法・国際刑事法といった人間に焦点を当てた国際法の分野を対象とすることから、理論的な学問体系も念頭に置いて勉強を進めることができます。

この理念に共鳴する学生は、学部を問わず勇気を持って本プロジェクトの門を叩いてください。仲間と一緒に心と知を成長させましょう。



国際の狭間に置かれた
人々に寄り添う
心と知
KARDIANOIA